

平成 22 年 5 月 21 日現在

研究種目：基盤研究 (C)
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19530770
 研究課題名 (和文) 教員養成大学学生が子どもたちと触れあうことのできる総合的音楽表現作品の開発
 研究課題名 (英文) Production of a comprehensive musical work that teaches college students that music can touch children's hearts.
 研究代表者
 石田 久大 (ISHIDA HISAO)
 北海道教育大学・教育学部・教授
 研究者番号：30193329

研究成果の概要 (和文)：地域に伝わるアイヌの題材をもとに、子どものための音楽劇作品「おもしろオペレッタ 金の子犬銀の子犬」を創作した。この作品を旭川近郊の小学校で行った。この公演の為に、学生たちは音楽のみならず演技も学習した。学生たちは衣装や道具なども創った。彼らはこれを通じ多くの経験と教師としての高い資質を会得したが、このことはアンケート調査からも確認できた。公演の後の子供たちからの手紙から、この作品を劇と音楽面から考察し、本オペレッタ作品が教育的にも価値があるとの確証を得た。

研究成果の概要 (英文)：We created an operetta for children titled “Kin no Inu, Gin no Inu (Golden Dog and Silver Dog)” that is based on an Ainu folk tale. It was performed at some elementary schools around Asahikawa. In the process of preparation for these performances, students who are studying music as a specialty learned not only musical skills but also acting ability. They made costumes, stage settings and stage properties themselves. They have learned a lot of things from this experience and highly talented teachers. This can be confirmed by survey of students. After the performance we received letters from children who saw this operetta. Through those letters we see deep appreciation of children on the theme of this drama and music, therefore we are confident that this operetta also has great educational value to children.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2008年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：鑑賞教育 音楽劇創作 地域貢献

1. 研究開始当初の背景

(1) 音楽科教育において鑑賞教育が果たす役

割は大変大きいものがあるが、実際に生の演奏を鑑賞することは少ない。とりわけ、道内の小規模校においては、生の演奏会に触れることも稀である。

(2) 音楽劇は、視覚にも訴えかえる力が強く、子どもたちの音楽に対する興味関心を育むために有効な鑑賞手段である。しかしながら、演奏するための適当な音楽劇は少なく、地域に由来する鑑賞用作品はほとんど存在していない。

(3) 教育大学音楽科学生は、教育現場の小・中学生と音楽を通じ日常的に触れ合い、教育的な資質を身につけて行く必要があると思われる。

2. 研究の目的

(1) 小・中学校において、一コマの授業時間内に上演可能で、且つ地域の史実などを題材にした質の高い鑑賞用音楽劇作品を創作すること。

(2) 創作した作品を、本学教員養成の学生が、小・中学校の子どもたちとの前で実際に演奏を行い、作品の音楽鑑賞用教材としての教育的成果を、子どもたちの感想文などから検証すること。

(3) 音楽劇を上演することが、教員養成学部学生としての資質向上や実践力を高めることにどのようにつながってゆくのかを検証すること。また、このような活動が、学校現場と教員養成大学との新しい関係の構築にどのように寄与してゆくのかについても考察してゆくこと。

3. 研究の方法

(1) 平成19年度

平成19年度前半は、題材探しと台本作成のための調査を行う。道内に伝わる伝承・史実を掘り起こし、音楽劇の内容として適当な台本となり得る題材を捜す。年度後半では、題材を決定し音楽劇台本として粗筋、台詞作成を行う。この作業に関して、研究代表者と研究分担者は、それぞれの専門分野および役割分担から、批判的考察を交え検討してゆく。さらに、研究分担者は台詞作成の進行に並行して、それぞれの分担セクションのイメージを具体化させる。これらの作業について齟齬がないように進めるために、定期的に研究会を開催しながら進めてゆく。

台詞が完成したのちの作曲については、作

曲担当研究分担者が行う。この間、他の研究分担者は、研究代表者とともに作品完成後学生がその作品演奏をいかに円滑に進めることが出来るか計画を作成し検討する。

(2) 平成20年度

平成20年度前半では、前年度に引き続き作曲が行われ、音楽劇が作品としておおむね完成することとなる。この段階で、研究代表者と分担者は、作品についてそれぞれの専門分野からさらなる考察を行い作品の手直し等の作業を行う。さらに、学生たちにより部分的な試演を行う。

年度後半では、平成21年度の学生による学校公演に向けての実際的な準備に入る。特に、歌唱指導、器楽指導、演出、演技指導などを担当する研究者は、学生たちと密接な関わりを持つことになる。その場合、本研究の目的と教育的な意義について十分に留意しながら指導する。また、美術、技術、家庭などの学生の連携により、大道具、小道具、衣装づくりについて具体化してゆくが、その場合の他専攻とのカリキュラムの連携についても関係教員と検討し、新カリキュラムの側面からの考察を行う。

市の教育委員会、校長会などに、本件研究についての理解を求め、次年度の学校公演に実施について打診し依頼する。

(3) 平成21年度以降

平成21年度は、完成した音楽劇作品が、学生により実際に小中学校で公演されることになる。そのための、音楽稽古、演技稽古、舞台美術、衣装制作の指導、また公演校との連絡は、研究代表者と分担研究者全員により指導や調整が行われるが、研究の目的から逸脱することのないように頻りに打ち合わせを行う。創作された音楽劇が上演された場合の教育的効果を探るために、研究者は、公演の準備段階から、学生が音楽劇上演にどのように関わり活動するのか、また、児童生徒達との関わりの様子などを観察する。公演終了後は、アンケートや、感想文により研究目的について調査分析を行う。これと並行し、研究代表者は研究分担者を定期的に招集し、このことについての意見交換を行い、成果をまとめる。作品そのものについても、学校音楽劇としての問題点はないか検証を行う。

4. 研究成果

(1) 小・中学校鑑賞用音楽劇作品 の創出

作品名 (楽譜)

おもしろオペレッタ「金の子犬 銀の子犬」

作品創出までの経緯：平成19年度から20年度の前半にかけて観賞用音楽劇教材を創作した。題材探しのための調査は、旭川市立図書館、北海道立図書館などの文献をもとに行った。しかし、調査した話の多くは、劇の内容として展開しにくい断片的なものが多く、また、台本となりそうな民話の多くは、本州からの移住者とともに道内に入ってきた話が多かった。平成19年度後半は、北海道の先住民であるアイヌに伝わる話に焦点を絞り、音楽劇の題材を求めることとした。本大学の位置する旭川市近文地区は、昔よりチカプミアイヌの多く居住する地域である。この地は、金田一京助に見出され、その後まもなく夭折した最初のアイヌ文学の女流作家である知里幸恵の所縁の地であり、また、知里幸恵の弟で最初のアイヌ人のアイヌ民族学者、知里真志保が若い時期に過ごし、アイヌを専門とする民俗学者への志が形成された地でもある。この地に位置する大学として、アイヌの題材に音楽劇の構想を求めることは極めて自然なことであり、アイヌを題材とした音楽劇が創られることは、先住民族であるのアイヌの文化や音楽を、小・中学生のみならず、教員養成大学学生にも認識させてゆくよい契機につながると考える。そこで、旭川に縁の深く多くの著作を残した知里真志保の著作集である北海道の伝承の昔話の中から、「金の子犬 銀の子犬」を題材とすることとした。作曲は、岩見沢校の二橋潤一が行ったが、アイヌ歌謡の旋律素材を使った曲がおりこめられている。

(2) 近郊小学校における音楽劇公演と記録DVD

- ・日時 平成22年3月23日
10時30分～11時45分
- ・公演場所 旭川市立旭川第二小学校
- ・記録DVD 約50分

公演までの経緯：本科研費で創作した音楽劇は、旭川市立旭川第二小学校で公演を行うこととなった。この準備は、本学旭川校音楽科カリキュラム2年生3年生必修科目であり、フィールド的な性格を持つ「総合的音楽活動の実践」を使い行われた。制作にあたっての基本姿勢は、学生主体の制作活動とし舞台制作のプランは学生によって進められた。従って、音楽稽古のほか演出、衣装、小道具などの実施計画が立てられた。制作にあたっては、音楽科の学生の他に、衣装製作として家庭科被服の学生2名と背景画デザインとして美術科の学生1名が加わり行われた。また、劇中の「鶴の舞」については川村カネト・アイヌ記念館（旭川市）の川村久恵氏が指導にあた

った。

(3) 学生に対する意識調査と小学生の感想文などからの作品評価

本研究では、創作した作品が鑑賞教材として子供達あるいは先生たちがどのように評価しているか。また、学生たちが小学校での音楽劇公演を通じて、教員の資質向上のうえでのどのような感想を持っているか感想文やアンケートによって考察した。

[学生に対するアンケート調査内容]

- 設問① 音楽劇に取り組む有益性
- 設問② 教師としての資質向上
- 設問③ 取り組んでみて楽しかったか
- 設問④ 芝居を学ぶことの必要性
- 設問⑤ 衣装、小道具制作の経験の有益性
- 設問⑥ 声楽専攻以外が歌うことについて
- 設問⑦ アイヌ文化理解に役立ったか
- 設問⑧ 音楽鑑賞教材としての適正性
- 設問⑨ 授業外の時間を費やしたことについて
- 設問⑩ 子どもたちに音楽劇を経験させたいか
- 設問⑪ 今回、音楽劇を行って良かったか

	良い	普通	悪い	合計	良い	普通	悪い
設問①	14	1	0	15	93%	7%	0%
設問②	8	7	0	15	53%	47%	0%
設問③	8	5	2	15	53%	33%	13%
設問④	11	3	1	15	73%	20%	7%
設問⑤	7	8	0	15	47%	53%	0%
設問⑥	13	2	0	15	87%	13%	0%
設問⑦	6	8	1	15	40%	53%	7%
設問⑧	7	7	1	15	47%	47%	7%
設問⑨	1	9	5	15	7%	60%	33%
設問⑩	10	4	1	15	67%	27%	7%
設問⑪	10	5	0	15	67%	33%	0%

考察

アンケートは、各設問に対して3段階で回答するものである。よって、上記の表のように「良い、普通、悪い」という言葉に置き換えて回答の文言の統一を図ることとする。

設問①において「良い」としたものが93%であり、子どもたちへの伝え方、協調性を学

ぶことができる等の理由から、授業として音楽劇に取り組むことが有益であるとしている。また、設問⑥においても、声楽専攻以外の人が舞台上で歌うことについて87%が「良い」としており、教師として子どもの前で歌うことは、専攻（音楽教育、ピアノ、管楽器、声楽）に関係なく必要な能力なので、舞台上で歌う経験が重要であると捉えている。他の設問（設問⑨以外）においても「良い」と「普通」を合わせると80%以上であり、音楽劇を学生同士が協力し合って作り上げることやアイヌ文化を理解する過程を経ながら、それを題材とする鑑賞教材としての音楽劇を教育現場で上演することは、表現者としてのパフォーマンス能力を向上させ、将来、教師として役立つ実践的で貴重な経験であったと多くの学生が考えていると言ってよいであろう。しかしながら、設問⑨「授業時間の他にも練習などで時間を費やしたことについて」において、33%が「悪い」と答えており、授業時間内で、綿密な計画に基づき、役割分担に全員が責任を持ちながら、舞台上に必要な音楽稽古、演技指導、大・小道具や衣装の作成などを効率的に進める必要があるという意見が多かった。このことについては次回に向けて、この授業の在り方、進め方について学生と話し合いながら、より質の高い音楽劇が公演できるよう、具体的に改善していかねければならない課題と考える。最後に、自由記述にあるように、色々と反省点、改善点はあるものの、結果として音楽劇を見た子どもたちからの感想に喜びを得られ、また、鑑賞しているときの子どもの反応を直に感じることができて、教育現場での体験的学習として実りの多い活動であったと理解していると考えられる。

鑑賞をした小学生5年生の感想文は、ほとんどのものが作品に好感をもったものであった。しかし、それ自体は作品の評価そのものにはなりにくい。なお、科学研究費補助金報告書には、小学生の感想を掲載済みである。

研究の位置づけと今後の展望

本研究は、北海道教育大学旭川校音楽科カリキュラムのフィールド的性格を持つ演習「総合的な音楽活動の実践」の実践研究である。研究目的は、鑑賞用の音楽劇作品を創作し、その作品を学生が小学校で実際に演奏を行い、その教育的意味について検証することであった。従って、本研究の目的は当初の計画の通りに行えたものと考えている。

成果物として、台本や楽譜そして公演記録を完成させた。しかし、作品や研究そのものの評価については、この研究の性格上、学生

たちへのアンケート結果や子どもたちなどの感想文によって考察するしか方法がなく、明確な自己評価を導き出すことは難しい。おそらく、このような教育活動が継続され、学んだ学生達が教育現場に入ってから、本研究企画の本質的な意義や評価が明らかになってくるものと思われる。その時点で予想される成果は、地方の教育大学が地域の題材に根ざした鑑賞用の音楽作品を数多く創造してゆくことにより生まれる音楽教育の新たな展開の可能性であり、また、大学の教員や学生が、生の公演を通じて小・中学校の児童・生徒との触れ合いの場を恒常的に設けてゆくことにより構築できる、大学と学校教育現場との緊密な関係などである。教育大学系音楽科が、学生の創造的音楽活動を通じて、教育現場との関係を深めてゆくことは、教育学部の今後の存在意義を明確にしてゆくためにも、必要な事柄であると考えられる。

本研究では、地域を見つめなおすことや、教育現場と大学音楽科との連携の在り方、また、その為に教員養成大学教員が果たしてゆかなければならない役割など、多くの課題を現実のものとして再認識させられることとなった。今後も、こうした取り組みの中で、これら様々な課題についての認識を深めてゆきたいと考えている。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔図書〕（計2件）

- ① 石田久大, 菅野道雄, 森田寛, 杉江光, 二橋潤一, 北海道教育大学音楽教育講座編, 科学研究費補助金報告書「教員養成大学学生が子どもたちと触れ合うことのできる総合的音楽表現作品の開発」, 2010, 25
- ② 石田久大 (台本), 二橋潤一 (作曲), 北海道教育大学音楽教育講座編, おもしろオペレッタ「金の子犬 銀の子犬」(楽譜) (DVD付), 2010, 94

6. 研究組織

(1) 研究代表者

石田 久大 (ISHIDA HISAO)
北海道教育大学・教育学部・教授
研究者番号：30193329

(2) 研究分担者

菅野 道雄 (SUGANO MICHIO)
北海道教育大学・教育学部・教授

研究者番号：10344540

森田 寛 (MORITA HIROSHI)

北海道教育大学・教育学部・教授

研究者番号：20113681

杉江 光 (SUGIE KOU)

北海道教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：40271720

二橋 潤一 (NIHASHI JUNICHI)

北海道教育大学・教育学部・教授

研究者番号：70312428

(3)連携研究者

なし